

授業力向上推進プロジェクト 実践報告書

岐阜県教育委員会 教育研修課

1 研究主題について

(1) 研究主題

資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る授業の工夫～生徒一人一人の実態を見つめた授業改善を図る～

(2) 主題設定の理由

現行の学習指導要領が、令和元年度からの移行期間を経て、令和4年度入学生から年次進行で実施され、4年が経過しようとしている。

ここで改めて、現行学習指導要領のポイントとして、次の3点を確認する。

- ①「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等において育成すべき資質・能力を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理した。
- ②「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行う。
- ③学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの充実。

また、令和7年より次期学習指導要領の改訂に向けて、中央教育審議会の検討が始まった。その議事録には、現行学習指導要領の実施に関わる次のような課題が示された。

① 社会的期待と現状

芸術系教科に対する社会的期待は、創造性や感性の育成、文化芸術への親しみである。AI時代において、人間ならではの身体性や直観の価値が再評価されている。現行学習指導要領は資質・能力の三本柱を重視しているが、子供たちが学びの意義を実感している割合は60%程度にとどまっている。この現状を踏まえ、なぜ芸術を学ぶのかとい

う問いを改めて共有する必要がある。

② 課題と成果（概要）

成果として、〔共通事項〕や「知識」を意識した授業改善の取組が浸透してきた。その一方、教師主導の授業、自律的学習の不足、表現と鑑賞の活動の関連の弱さが課題である。ICT活用や地域連携の萌芽はあるが、まだ十分とは言えない。

③ 課題の詳細（授業・評価）

授業では、〔共通事項〕が形や色などの要素列挙に偏りがちで、子供が自ら獲得する知識への転換が不十分。鑑賞で「味わう」に届く条件づくりも不足している。評価は結果中心から過程重視への転換が求められている。

④ 課題の詳細（ICT・文化・系統性）

ICTやメディア芸術の活用ノウハウが不足しており、生活や地域に溢れる美術文化の教材化も不十分。また、小・中・高の学びの積み重ねを見える化する仕組みが未整備。子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視。

第1回教育課程部会芸術ワーキンググループにより提示されたこれらの課題から、現行学習指導要領における理解が不十分な観点が明らかにされた。そこで、その内容を今一度確認し、実装していくことにこそ価値があると考えた。

(3) 美術教育で育てたい生徒の姿

- ・創造する楽しさを味わえる人
- ・感性と表現力の向上を求める人
- ・美術と美術文化への好感的な理解ができ、生涯にわたって関わり続けられる人

上記は、平成30年告示の高等学校学習指導要領を私なりの言葉で変換したものである。

さらに、県の特性を生かした教育をするために以下の工夫が考えられる。

- ① 地域の美術文化（伝統工芸や現代作家）を授業に取り入れる。（例：東濃焼き物、飛騨版画など）

- ② 鑑賞活動で「対話型鑑賞」を行い、他者の感じ方を共有する。
- ③ ICTを活用して世界の美術作品に触れる。

- ⑥ ICTやメディア芸術の活用について
- ⑦ 小・中・高の学びの積み重ねを見える化する仕組み

2 研究内容について

(1) 研究仮説

資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る指導の工夫をすることで、創造する楽しさを味わい、感性と表現力の向上を求め、美術と美術文化への好感的な理解ができ、ひいては生涯にわたって関わり続けられるようになるのではないかと仮説を立てた。

この「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る指導の工夫」とは、以下5つの視点のサイクルを、大きくは題材ごとに、小さくは活動内容ごとに繰り返し検討をしていくことである。

- ① どんな生徒なのか
- ② どんな資質・能力を育成するのか
- ③ どのような場・内容で行うか
- ④ どのような手立てを用いるか
- ⑤ どのような目指す姿になったか

(2) 研究内容(参観の視点)

愛知県高等学校美術・工芸教育研究会へ参加し、他県の実態についての理解を深めるとともに、岐阜県へ生かすことを学ぶ。

以下7つは参加時の視点である。本訪問とは直接関わらない視点もあるが、参考のため示した。

- ① 「なぜ芸術を学ぶのか」に対する実感を伴う答えがもてるような題材設定の工夫
資質・能力と社会のつながり
- ② 主体的な学びを充実させる工夫
より強く表したいことを心の中に思い描くための主題を生成の工夫
- ③ 表現と鑑賞の関わり方
児童生徒が考える場面と教師が教える場面の組み立て
- ④ 生徒が自ら知識を獲得するための、〔共通事項〕を意識した授業設計
対話によって自分の考えなどを広めたり深めたりする場面の設定
- ⑤ 結果(作品)中心から過程重視へと転換した指導と評価の在り方
児童生徒自身の変容を自覚できる場面の設定

3 実践より

実践事例1「私の家—建築模型」(美術Ⅱ)

(以下は、授業を参観しての感想である。)

本授業には、生徒が「芸術を学ぶ必然」を実感するためのあらゆる工夫があると感じた。

まず一つは、生活や社会、さらには将来と関係を持たせることで、「当事者意識」を高めて授業に臨んでいる。

また、授業者は生徒の実態

(発達段階)を十分に把握して題材の計画及び実施をされている。


授業後の研究会にて「生徒が求めているものと実際に教師が求めるもののバランスをいつも考えている。」と言われた。これは、決して一朝一夕で

行えるものではなく、本当に難しい作業である。私自身は、義務教育籍の人であり、小・中学校の各学校には様々な能力差のある児童生徒がいるが、基本的にどの学校もそのバランスは似たようなものである。しかし、高等学校の場合は、学校の中にいる生徒の能力差にそれほど大きな違いはないかもしれないが、学校ごとの能力差は大きいことが想定される。


このことから、何が言えるかということ、例えば中学校の先生が、中学校の授業を参観したとして、「いいな」と思ったら、比較的まねをしやすい。一方、高等学校では「いいな。」と思ったと

大きな庭がある奇抜屋根の家

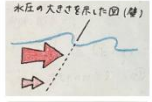
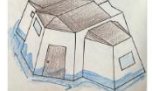
■家族構成
自分・配偶者
子ども(女2)
犬



■デザインコンセプト
子供が2人いる家族構成から、「子供がすくすく成長する」という事をコンセプトにしてデザインしました。子供がすくすく成長出来る環境として、①家族で食事を囲める、②外で寝る、③趣味と向き合える、④勉強に集中できる事が大事だと考えたので、食卓を居間広間に全体を配置するよう、中央付近に配置しました。そして外ですぐに遊べるように庭を広く確保しました。近所の方への影響など納音を気にせずにピアノの趣味を楽しむようにピアノの間に防音壁を積み、勉強に集中環境になるように2人の部屋を隣同士ではなく別々に設けました。



■防災(水害)コンセプト
DVDを視聴した際、家の根っこごと水に流されている家が多くみられたため根太が強くなるように家の形を広く上を軽くするためフリンのような形にし、水が来る想定した方向をとがらせて水が流れていくようにしました。他には水が流れてきてもドアが壊れようようにドアのつける向きを考えた。勝手口を玄関とは逆側につける事で水が家に溜まって逃げられなくなる状況が起こらないようにしました。



して、そのままの授業展開をしても、生徒の実態が大きく違うことにより、うまくいかないことが多々出てくるのである。

つまり、授業者の「バランス」という言葉の中には、「こういう生徒が多かったら授業をこういう風に変えるよ」という授業改善の工夫が潜んでいると感じた。例えば、本題材の「建築模型」という題材は、教科書では発想・構想に重きを置くデザイン題材となっている。授業者が立案された題材指導計画でいうと、「二次展開」までとなる。普通の高校生ならばここまでで十分と言えるが、敢えてスチレンボードでの模型づくりまでを設定している。それは、なぜなのか・・・。

授業者は「絵画、彫刻、デザインなどの領域を網羅した段階で、全ての力を発揮して建築模型に挑戦してほしい。」と言われた。「模型をつくる」ということは、建築可能なものでないと形を成すことができない。一方、出来上がった時には、より現実的なものとなり、自分の願いと生活がつながり、身近な生活の一部として実感できるというわけだ。つまり、それだけ日常や将来というところに目を向けさせて、社会とのつながりを実感させていると言える。また、それが可能な子たちだからこそできるとも言える。実際に授業者は「この子たちだからこそ、こういった技能を身に付けさせたい。」と言われた。

では、学校や生徒の実態に応じて、他校であったり年度が変わり生徒の様相が変わったりした場合には、どのような指導の工夫ができるのかを考えてみた。

題材設定での工夫

- ・ 環境条件（環境、資金、地域性）
- ・ どこまで制作するか（構想アイデア、模型、着色）
- ・ 模型素材の工夫（粘土、厚紙、方眼紙）
- ・ 建築物の種類（お店、ホテル、学校、公民館、もちろん家も）

授業（一単位時間）での工夫

- ・ 鑑賞する資料
- ・ その資料の見せ方
- ・ 見せる（見れる）タイミング
- ・ ワークシート
- ・ ICTの活用の仕方
- ・ 最後のまとめ方

これらのことを、各々の学校、学級の生徒を思いながら、どういう工夫をすることで「わくわくしながら力をつけていくことができるかな？」と考えていくことが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善なのだろうと思う。

また、授業公開後の研究会で、「うちの学校にはこういう子が多いから、この題材だったらこうするかな。」のような交流が活発になると、「授業をつくる（改善する）」教師の楽しさを味わうことができそうだと思う。

また余談になるが、帰宅後に高校2年生の娘に「余弦定理って分かるか？」と話をしたら、懇切丁寧に説明してくれた。その後「じゃあ、数学の問題以外で使ったことあるか？」と尋ねると、「あるわけない。」と間髪入れずに答えた。しかしながら、本授業である男子生徒は、スチレンボードにびっしりと余弦定理の計算式を書き、その理由を「きれいな模型を作りたいから。」と答えてくれた。おそらくこの生徒にとっての余弦定理は「数学のテストのため」ではなく、正確な形の構造を知るための知識であり、模型を作るための武器になっていると感じた。仮に、本題材がアイデアまでのものであったり、素材がスチレンボードでなく粘土であったりしたら、この生徒は間違いなく余弦定理を使っていなかったであろう。

さらに翌日、職場の数学担当者にこの話をしたら、「美術の授業でも、数学で扱う公式を使ってくれるなんて本当にうれしいし、数学以外で使うことで、理解が深まる。」と言っていた。本題材に限ることではないが、このように他教科との関連を図りながらカリキュラムマネジメントを進めることは、生きた知識を理解することができ、さらに社会とのつながりを実感することができる。

実践事例2「造創造—造形ノートあいち—」より

「造創造—造形ノートあいち—」は愛知県高等学校美術・工芸教育研究会が1年間の研究のまとめとして発刊しているものである。冒頭の会長の言葉から芸術教育を進めていく身として、仕事に対する「誇らしさ」と「責任感」を改めて感じた。また、今後思い悩むであろう、生徒の多様化、AIの普及など社会の変化に対応した学びの在り方について、アンテナを高くして世の流れに気を配ることと、何よりも芸術教育の不易の価値

を常に見つめ続けることの大切さに気付かされた。

4つの活動報告からは、高等学校2名、特別支援学校2名の先生から様々な視点で発表されていることに驚いた。

一つは、題材のつながりを工夫して、資質・能力の育成、主体性の向上を目指したカリキュラムデザインがされていた。その中で、生徒の実態に応じた評価規準を十分に練って考えることで、制作を楽しんで行いながらも、完成作品に対する満足感だけでなく、学習過程での自分の工夫に対する充実感が得られる事が分かった。

二つは、異文化に触れた海外旅行記である。美術教師はこう言った鑑賞活動や表現活動をしていくことが自己研鑽と言えるので、自己研鑽としてはこれだけで十分と言える。さらに教員研修として「集団として学ぶ」のであれば、これをどのように生徒に伝えて、生徒がどんな反応をして、さらに美術の授業やその後どんな風に影響をしようとしたかを交流できればなおよいと思った。

三つは、「美味しそうな天ぷら」をつくる特別支援学校の食品サンプル題材である。作業工程や注意事項が丁寧に書かれているので、自分の学校ならどのように応用できるかを考えながら読むことができるものになっていた。このような魅力的な題材であれば、「高校生ならこんなことしたくなるかも。」「うちの地域だったら・・・。」と活発に交流する会を目指したいと思った。

また、特別支援学校だからこそ、経験を通して知識を得ることが多くあり、「湯煎とは何か」「ロウはどんなものか」を知るきっかけとなる場面がある。さらに、下学年部にお店屋さんごっこをするような題材や行事があるならば、後輩も交えて褒めてもらいながら振り返るのだろうと思った。このように、特別支援教育の先生は、他題材や他教科と知識をつなげたり、行事と教科をつなげたりすることに長けていらっしゃると感じた。

最後は、版画表現の広がり紹介されていた。感想交流で、理科的内容と関連付ければ・・・という意見が出ていたが、学習指導要領の中に「感性は、知性と一体化して人間性や創造性の根幹をなすものであり、表現や鑑賞の活動を通して、価値を感受し、想像力を働かせ豊かなイメージを創出する際に働くもの」とある。つまり、理科的な知識を獲得することで、自然物から感受するものが、ぼんやりと何となく感じているものが、少し

ずつはっきりとしていくのだろうと思った。

実践事例3「美術部の在り方について」

教員の働き方改革に伴い、各学校における部活動の在り方が見直されている。しかしながら、単に教員の働く時間を減らすために部活動の時間を減らしていると考えるのは大きな誤解である。

時代の流れに伴って、人も環境も考え方も変わるため、当然、部活動の在り方も変えていかねばならない。そこで、よりよい在り方を模索していくことは教師として大切な営みである。

本稿では、様々な視点から執筆者が捉えた課題に対して、部活動の取組とその関連が紹介されている。授業改善と同様、部活動改善においても生徒の実態、さらには地域や学校の実態を考慮しなくてはならないので、全ての取組が全ての学校に適用できるわけではないが、ヒントとなる要素が散りばめられているので、以下に紹介する。

- ・美術部は教科美術の探究の場となりうる。
- ・美術部は多様な練習方法により、基本的な技術を自ら習得していこうとする。
- ・進捗状況の報告会を位置付け、個を振り返ったり、全体のレベルアップを図ったりする。
- ・外部講師による指導・講義を充実する。
- ・地域と連携した活動を充実する。

4 まとめ

ここまで述べたものは、愛知県高等学校美術・工芸教育研究会に参加して学んだ「授業改善」や「部活動改善」の視点を紹介したに過ぎない。これから、これらの視点を基にして、各学校で先生方による授業改善をしていただくことで、「生徒の〇〇力の向上が見られた」とか「生徒の発言が増えた」などの成果につながると思う。また、授業改善とは言うものの、必ずしも成果とはならず「時間配分が難しい」「制作に消極的な生徒がいる」など不十分な場合もある。そういった時にこそ、みんなで原因や改善策を探り合えるのが「教科研究会」であろうと思う。

参考：中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会芸術ワーキンググループ開催状況より

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/113/index.html